

## ロビンソン物における子ども

### －「自然」の子どもを追って－

## The Children Drifting in the Sea in Four Literary Work

### － On the Children in the "Nature" －

長嶺宏作（帝京科学大学）

Kosaku NAGAMINE (Teikyo University of Science)

要約：本稿ではロビンソン物と呼ばれる児童文学に焦点をあてながら、近代的な主体としての子どもが、どのように描かれてきたのかを明らかにしたい。ルソーが、『エミール』の中で成人の理想像としてロビンソンを見たように、ロビンソンは子どもにとって目指される人間像の一つでもあった。ルソー以降、ロビンソン物は、主人公を子どもに変えて、子どもの物語として再生産され、どんな状況においても理性的な行動をしえる「自然人」、あるいは近代的な主体の物語となった。そこでバランタインの『珊瑚島』、ステューブンスの『宝島』、ヴェルヌの『十五少年漂流記』、ゴールディングの『蠅の王』の4つの作品を取り上げ、「自然」の子どもの変遷を明らかにする。4つの作品の子ども像を考察したうえで、自明視されなくなった現代の子ども像・人間像が、どのように再び語られうるのかについて考察する。

### I. はじめに

本稿ではロビンソン物と呼ばれる児童文学に焦点をあてながら、近代的な主体としての子どもが、どのように描かれてきたのかを明らかにしたい。『ロビンソン・クルーソー』は、デフォー(1667)が1719年に発表し、その後、多くのパロディとしてロビンソン物を派生させた。『ロビンソン・クルーソー』は、実際に漂流体験を持つセルカークの話しに着想を得て書かれた大人向けの物語であった。

この物語をジャン・ジャック・ルソー(1712-1764, p.325)は、『エミール』において、少年エミールが最初に読む本として取り上げた。ルソーは、ロビンソン・クルーソーに極限状態におかれても、なお理性的で自立的な人間を見たのであり、近代市民社会を形成するのに必要な市民(近代的主体)の具体的なイメージであった。したがって、ルソーにとっての「自然人」の具体的なイメージは、クルーソーであったともいえる。

しかし、大塚久雄(1966)が指摘するようにロビンソン・クルーソーは、決して自然なものではなく当時、イギリスで台頭してきた中流階級のユートピア的な人間像であり、その人間像は勤勉で禁欲的な生活を営み、積極的な経済活動を行う個人であった。すなわち、大塚によれば、クルーソーは資本主義社会における合理的で理性的な経済人であった。近代的な主体の具体的なイメー

ジが、合理性に貫徹されていたとすれば、近代教育における目指すべき理想像も、合理的な人間像が当初から描かれていたことになる。

もちろん今日、「自然人」、「自然法」という概念は、近代が作り出したフィクションであると批判される。しかし一方で、「自然」は今日もなお、社会制度の前提条件となり続けている。政治哲学の理念を辿れば、トマス・ホッブズ(1588-1679)は、人間の自然状態を「万人に対する万人の闘争」と設定することで、絶対理性となるべき絶対君主を想定し、ロック(1632-1704)は人間の自然状態を本来的に友愛的で教育可能な「白紙(タブラ・ラサ)」と設定することで名誉革命後のイギリスの政治制度を肯定した。さらに、今日、リベラル・デモクラシーの理論的な基盤の一つであるジョン・ロールズ(1921-2002)は、人々が全ての価値から中立的な原初状態としての「無知のヴェール」を設定することで、格差原理を導きだしている。「自然」は概念装置として、今日もなお、私たちの思考の中に息づいている。

しかしながら、政治哲学上の推論は常に具体的なイメージと抽象的な理論の間で断絶があり、その断絶を埋めてきたのが教育学であり、文学であるといえる。ホッブズやロックが言う「自然人」としての人間がどのように教育され、その人間像が具体的に何であったのかを考える必要は教育学においては重要である。

そこで本稿では、ロビンソン・クルーソー自体ではなくて、その刺激を受けて書かれた児童文学（ロビンソン物）を考察したい。本稿で明らかにしたいことは、ロビンソン・クルーソーに刺激されて書かれた児童文学（ロビンソン物）が、どのようにして子どもや世界を描いたかである。

ルソーが、『エミール』の中で成人の理想像としてロビンソンを見たように、ロビンソンは子どもにとって目指される人間像の一つでもあった。ルソー以降、ロビンソン物は主人公を子どもに変えて、子どもの物語として再生産され、どんな状況においても理性的な行動をしえる「自然人」、あるいは近代的な主体の物語となった。

そこでロビンソン物に描かれる子どもは、どのような子ども像と子どもの世界が展開されたのだろうか。

すでに、冒頭で述べたように社会科学において大塚が、禁欲的にも利益を追求していく経済人が近代的な人間像であったことを説明している。また、文学研究においても岩尾龍太郎（2000）によって、ロビンソン物の変遷についての詳細な研究がある。

しかし、本稿では、教育学的な観点から、今日、目指すべき人間像が揺らぐ中で、どのような子ども像・人間像が語られ、語られえるのかを考えていきたい。

## Ⅱ. 4冊のロビンソン物

本稿では、ロビンソン物として4冊の本を取り上げたい。

一つは、ロビンソン物の初期作品であるロバート・バルタインの『珊瑚島』（原作は1858年出版）である。

もう一つは、『ジキル博士とハイド氏』などの名作を書いたステーブンスの『宝島』（原作は1883年出版）である。『宝島』は、ロビンソン・クルーソーのように無人島に漂流する物語ではないが、主人公の少年はバルタインの『珊瑚島』の影響を受け、物語の中にベン・ガンなるロビンソン・クルーソーをモデルにした人物が登場する。

もう一つは、ヴェルヌの『十五少年漂流記』（原作は1888年）である。

そして最後に、ゴールディングの『蠅の王』である。『蠅の王』（原作は1953年）は、ロビンソン物の中でも、無人島に漂流した少年たちが最後にはお互いを殺しあうという、他のロビンソン物とは正反対に人間の闇と向き合った作品であ

る。『蠅の王』は、児童文学というより大人の読者を対象とした物語であり、1950年代と時代が他の作品とは異なる。

しかし、ゴールディングは『蠅の王』の冒頭に、明確にロビンソン物の世界を読者に意識させるように、次のように書いている。

（少年たちが無人島に来て最初の集まりにて）  
「救助を待っている間は、この島で結構楽しくすごせるよ。」

彼は大きな身振りをした。

「まるで、本に書かれているとおりさ」

たちまち、がやがやいいだした。

「『宝島』みたいだ——」

「『燕号とアマゾン号』（ランサムの冒険小説、1930年）みたいだ——」

「『珊瑚島』みたいだ——」

ラーフは、ほら貝をうち振った。

「この島は、ぼくらのものなんだ。いい島だよ。大人たちが連れにきてくれるまで、おもしろく遊んでいようよ」（ゴールディング、1975、pp.53-54）

しかし、物語の最後に少年たちは蛮人のように理性を失い、少年同士の喧嘩から二人の子どもが死ぬという悲劇の後に、士官に救出される際に以下のように述べている。

「初めはうまくいったんです」とラーフがいった、「でも、そのあとで、いろんなことがあって——」

彼はいうのをやめた。

「ぼくらは初めはいっしょに団結してやっていたんです——」

士官は、相手の心をはげますように頷いた。

「ああ、分かっているよ。初めはものすごくうまくいったんだね。『珊瑚島』みたいだね」（ゴールディング、1975、pp.347-348）

現代社会の子ども像・人間像が、いつの間にか得体のしれない何者かになってしまっていることゴールディングは鮮やかに描くが、ここで登場する『珊瑚島』とはどのような物語であり、そもそも初期のロビンソン物の子ども像はどのような子どもであったのだろうか。

## Ⅲ. 野蛮なるものの改心

『珊瑚島』は、邦訳のタイトルは『さんご島の

三少年』とあるように、機知に富むラルフ、勇敢なジャック、お調子者のピーターキンの三人が主人公である。物語は、彼らの乗った帆船が暴風雨に遭い遭難し、彼らだけが助かり、無人島に到着するところから始まる。

この物語の全体を通して言えることは、全く明るいというところにある。遭難や困難にあっても危機は、ハイキングでもしているかのように解決していく。

例えば、少年たちは、熱帯の島に十分な食料があると分かると、しばらく海で泳いだり、果物を取ったり、思う存分に遊んでいる。しかも、『珊瑚島』の少年は、他の作品に見られる食べ物を蓄えることや計画的に家を建てることなどの仕事らしい仕事は、ほとんど行わない。

ヴェルヌの『十五少年漂流記』と比較すると、『十五少年漂流記』では年少の少年がたまに遊んだりするが、ほとんどの活動は冬に備えて食べ物を集めたり、狩りに出かけたり、家を確保したり、島を調べたりする。しかも、『十五少年漂流記』では、途中で生活が落ち着くと驚くべきことに、無人島で勉強まで行う。

一方で、『珊瑚島』では他の作品ほど明確には描かれていないが、少年たちが無人島を小さな王国に見立てる他の作品と共通する記述がある。

(ピーターキン)「ぼくらは、島のぬしになったんだ。われらが、この島をせんりょうしよう。島の黒んぼたちをしたがえて、つかってやろう。ジャック、きみは王さまになるといい、きみは総理大臣だ。そして、ぼくは―」「宮廷の道化師がいい」とジャックはいった。(バレンタイン, 1949, p. 33)

この箇所から分かるようにロビンソン・クルーソーと同様に、植民地経営でもするかのような征服的欲望が見られる。大塚久雄が指摘するように、ロビンソンは原住民の侵略を恐れ、柵を作り、砦を作り、土地を囲い込み、植民地として経営する合理的な経済人なのである。

そして、『珊瑚島』の少年たちも、例えば子どもであっても黒んぼを従えるという言葉にあるように原住民に対して優位性を持っている。この根拠は、当時の白人が抱いていた差別的な固定観念だけでなく、野蛮なものの克服として肯定化されている。その優位性とは野蛮な土人に対して西洋社会が持っている文明(科学)とキリスト教である。

三少年は無人島を探索し、船の漂着物を拾い集める。そこで、野蛮な世界と対照的に文明的な道具が広く使われ、最低限の文化的な生活を保障する。鉄や斧といった金属でカヌーを作り、火をおこすホクチ箱で焚き火を起こし、料理をすることができる。しかも、三少年は原住民である土人たちとの交流で絶えず、子どもにも関わらず、土人たちよりも理性的で鋭い判断ができる人間として描かれている。

というのも、この物語の主題の一つは少年たちの冒険と楽しみだけでなく、土人(蛮人)たちのキリスト教への改心の物語でもある。ステューブンスとヴェルヌにも宗教的テーマは見られるが、バレンタインの物語は宗教が物語の核心である。

物語は、以下のように展開する。無人島に漂流した三少年は、しばらく遊んでいるうちに、他の島から逃げてきた土人と追ってきた土人同士の争いに巻き込まれる。そこでジャックが相手方の酋長を倒したために、一方の土人グループを助ける結果となり、土人たちと交流する。

そこで土人のリーダーであるタラロと、女神として崇められているアバテアと知り合う。彼らは島を離れ、再び無人島に平穏が訪れるのだが、今度は、貿易船(海賊)がやってくる。この海賊にラルフだけが捕まってしまう。

しかし、ラルフは勇敢にも海賊に反抗したために、海賊の頭領に度胸が気に入られ海賊船に乗ってしばらく生活をする。その中で、海賊が襲った船にいた宣教師と出会う(宣教師は、土人を手なずけるのに役に立つとして解放される)。

そして、ある時、上陸した先で海賊が土人たちの争うことになり、海賊が負けてしまい、ラルフだけが生き残り、逃げ込んだ船でまた一人漂流する。すると、運良く元の無人島に再び漂着し、他の少年と合流する。海賊船で過ごす内にラルフは、近くに島があることが知っていたので、カヌーを使って無人島を脱出する(サモアあたりの群島を無人島の場所として設定している)。

そして、着いた先の島で土人のタラロと再び会う。この時、タラロは、アバテアを生贄に捧げようとしていた。そこで少年たちは生け贄に捧げられるアバテアを助けようと海賊船で知り合った宣教師と協力し、解放してほしいとタルロを説得する。しかし、説得はうまく行かなかった。そこで少年達で島からアバテアを連れ出すが、失敗して再びタルロに捕まって幽閉されてしまう。

しかし、奇跡が起き幽閉中に暴風雨(神風)が吹き、土人のグループに大きな被害をもたらす。



そこでタルロは改心をして、キリスト教の洗礼を受け、アバテアは解放される。

物語の展開は、波乱万丈なロールプレイングゲームのシナリオを読んでいるようである。『珊瑚島』のおもしろい点は、土人たちとの交流と改心である。土人たちの改心とは、土人の野蛮なるものに、少年たちの誠実さと理性が打ち勝つのである。

そして、時には土人だけでなく罪深い大人（海賊など）たちよりも、少年たちは正しい判断をする。例えば、最初に遭難するときに他の乗船者は、小さいボートに乗るのだが、少年たちは折れたマストに捕まって海に飛び込むのである。そうしてボートに乗った大人たちは岩に打ち付けられ、少年たちだけが助かる。この判断が正しいかどうか分からないが、子どもたちは自分自身で判断していくのである。

『珊瑚島』では、少年達の純朴さと誠実さが物語にあふれ、彼らの行動が神の祝福を受けているかのように描かれている。このように少年たちは、「自然な善性（イノセンス）」を持った存在として描かれ、少年それぞれの性格があらわしているように、子どもらしい楽しみ、勇気、智恵という要素が子ども像に見られる。

#### IV. 理性と野蛮の二面性

『珊瑚島』では、宗教が一つの主要テーマであり、土人たちの改心が物語の中心であった。もちろん、それをもたらしたのは、純真で誠実な子どもである。純真で誠実というのは理性的で、正直で、勇気のある子どもという意味であり、当時の社会常識を持った道徳的な子どもである。この子ども像は、ステューブンスの『宝島』の主人公であるジム少年に引き継がれる。ここでは『珊瑚島』よりも、勇敢で機知に富み、道徳的な少年としてジムが描かれている。

さて『宝島』の物語は、ジム少年が母親と経営する宿屋（ジムは母子家庭）に、ある時、元海賊の船長がやってきて、そのまま酒の飲みすぎにより脳溢血で死んでしまう。彼の持ち物に、宝島の地図が残されていた。この地図について町の医者リヴシーと郷士トレローニに相談したところ、宝を探しにいく冒険に出発することになる。しかし、募集した船員の中に、宝を隠した海賊の仲間のジョン・シルバーがいた。彼が島に到着すると反乱を起こし、ジムたちは危機に陥るが、ジムの機転やシルバーの海賊の仲間割れによって、最終的に宝を手に入れるという話である。

物語には、様々な道徳的な警句が入っている。例えば、ジムの母親が、元海賊の船長が死んだ時に、彼の財布から宿代を取る際、次のように述べる。

「あの悪者たちに、わたしが正直な女だってことを見せてやる。」と母はいった。「取らなきゃならん分だけは取るけど、あとはびた一文だって取らない。」（ステューブンス、1963, p.42）

母親は、たとえ相手が死んでいようと必要な分だけの金銭を貰っている。また興味深いのは、元海賊たちで反乱を起こすシルバーの会話である。シルバーは仲間に向かって、次のように述べる。

「おれは、イングランド（軍隊にいたとき）との時はちゃんと900ポンド金を貯めたし、プリント（宝を隠した海賊）との時は、2千ポンドを貯めた。ただの水夫にしちゃ悪くあるめえーみんな、安全に銀行にいれてあらあ。おい、まちがいないところはな、稼ぐことじゃねえ、貯めることだ。」（ステューブンス、1963, p.93）

シルバーは海賊にもかかわらず、銀行に大金を入れたら疑われるから、小さいお金を銀行以外にもいろいろなところに預ければよいと仲間に貯金を勧めている。もちろん、シルバーは悪事を働こうとしているのだが、当時の重要な美徳の一つである貯金を彼なりの仕方でも勧めている。（例えば、メリーポピンズにも貯金の歌が出てくる。歌詞では2ペンスでも貯金すれば、いつか大金になるという歌である。）

この物語に読者がひきつけられるのは、もう一人の主人公でもあるシルバーが善と悪が入り混じった二面性のある魅力的な人物として描かれているところにもある。シルバーは、反乱を起こした張本人にも関わらず仲間から嫌われて身の危険を感じるとトレローニ（ジム）側に最終的に寝返る。

そして、最後は宝を見つけ、ジムたちと帰る途中で、少しの宝を盗んで逃走する。ステューブンスがジキル博士とハイド氏で二重人格を描いたように、シルバーもまた複雑な人物として描写されている。したがって、一方では野蛮な海賊であり、一方で理性的なイギリス紳士のようなものである。

例えば、ジョンのことを仲間が回想して、次のように述べる。

「若い時にゃ、ええ学校へかよってたんだから、その気になりゃ、本に書いてあるみたいにしゃべれるんだ。それから豪傑だった—のっぽのジョンにかかったら、ライオンだって、ものの数でなかった。おれはこの目で見たが、いつか、あいつは四人と取っ組んで、全部の頭と頭とをいっしょくたにたたきつけてしまった—こっちは素手でな。」(スティーブンス, 1963, p.88)

このような人物描写は、『珊瑚島』には少なかったものであり、ある人物の中に理性と野蛮が混在している。

また、『宝島』自体は、海洋冒険ものであり、そこにクルーソーのような孤島で生き残っていく物語ではないが、ベン・ガンというクルーソーのように宝島に3年間一人で暮らしている人物が登場する。この人物も、一癖も二癖もある人物として描かれている。

彼は、宝を埋めた海賊の仲間であり、海賊の船長によって島ながしにされて宝島に置いてかれた人物である。彼は、ジムたちに何度も3年間の孤独によって改心し、信心深くなり、正直者であることを力説し、もちろん完全に信用できる人物ではないが、利害が一致しているトレローニ側に取り入る。最終的には、ベン・ガンは、ジムとともにイギリスに帰ってくるのだが、得た宝を3日で使い果たし、しがたい門番となっている。

このように宝島に出てくる大人は、ジムとは対照的に全員がどこか信頼できない大人たちである。例えば、町の名士のトレローニも、今ひとつ好意的には描かれていない。したがって、『珊瑚島』のような勧善懲悪的な世界ではなく、人間に内在する二面性や葛藤が描かれている。

実のところ、海賊の二面性は合理的な経済人の矛盾でもある。貯金などの禁欲と節制を勧めながらも、経済的な活動としての利益や私利を追求することに貪欲であり、場面に応じて立場をコロコロと変える。まさに、ベンチャー企業の社長などに代表される経済人のあざとさのようにも見えてしまう。

しかし、それでも少年ジムは、こうした問題から離れた純粹無垢(イノセンス)で中立的な存在である。『宝島』では、ジムは唯一の子どもであり、この物語の語り手でもあるのだ。

## V. 完全なる理性的な世界

『宝島』では、海賊という野蛮なる存在が理性

とも混在した人物として描かれていたが、基本的には子どものジムは純粹な存在として描かれていた。このような理性的で純粹な子どもの理想的な世界は、ヴェルヌの『十五少年漂流記』では、より完全な形で展開される。

『珊瑚島』は、ぼくらは島のぬしになって名前だけの王様を決めていたが、『十五少年漂流記』では、彼らは生活が落ち着くと、選挙を行って大統領を決めるなど、かなり本格的である。

十五少年(アメリカ・フランス・イギリス出身のニュージーランドに住んでいる少年と黒人の少年)は、もともと、イギリスのパブリック・スクールをモデルにした寄宿生の学校「チェアマン」小学校の生徒である。彼らは、夏休みを利用した航海旅行で遭難してしまった。したがって、彼らの無人島の生活は、修学旅行などの延長線のようなものである。

たとえば、無人島を学校の名前のチェアマンからとって、チェアマン島と呼び、朝にはお祈りをして、役割分担を決め、日記に日付や気温を記録する。前述したように、勉強もする。きわめつけは、クリスマス前に、学校でやった運動会までやるのだ。

彼らは、無人島に着いた時に遊ぼうとするのではなく、自分達の力を発揮するチャンスだと思い自立的な生活を目指すのである。無人島に居てまで勉強することや無人島に学校の名前をつけることなどは、ヴェルヌは無人島の子ども達に勤勉で自己規律的な生活をし、相互に助け合いながら集団生活を送る一つのユートピア社会を描いたといえる。

例えば、『十五少年漂流記』や『宝島』では、イギリス国旗を掲揚する場面が登場する。

『宝島』では、国旗が掲揚をすることで海賊たちから居場所が分かり、砲撃を受けるのだが、それでも国旗を降ろさない。なぜなら、ジム側の船長はイギリス国旗が自分たちの存在意義と海賊に潜在的な脅威を与えるからだとしている。このようなナショナルな象徴的な力が道徳として叙述されている。

一方で『十五少年漂流記』では、当初、イギリス国旗を丘の上に掲揚するのだが、途中でフランス人のブリアンが選挙で大統領になるとイギリス国旗を降ろし、手で編んだ木の皮でつくったボールのようなものを掲げる。これは島の少年達が国を越えた新しい団結の象徴として描写されている。このように無人島は、共和国的ユートピアとして描かれている。

もちろん、少年同士の争いはある。フランス人のブリアンとイギリス人のドノバンが対立するのだが、無人島に反乱を起こした水夫がやってきたときに、ドノバンは身を挺してブリアンを守ることでドノバンと和解する。

しかも、『十五少年漂流記』では、物語の終盤では、反乱を起こした水夫に囚われていた大人の女性と男性を助け、彼らと協力して島を脱出する。この二人の大人は、さながらイエスとマリアのようである。そして、十五少年はイエスの弟子達のようなものである。また、反乱を起こした水夫たちは、大人たちの手によって亡くなるか、間接的に死んでおり、少年たちが直接的に殺すことはない。

『十五少年漂流記』は、知恵、文明、神という理性が整合性を持って描かれている。特に、この遭難のきっかけを作ったのは、いたずらで船の係留ロープを外してしまったブリアンの弟のジャックであるが、ジャックは、その罪を気にし、物語の最後に罪を告白し、それを勇敢な行動で償う。その勇敢の行動は、凧にゴンドラをつけ飛ばして偵察をするという行為である。したがって、凧にゴンドラを吊るすという知恵と文明、ジャックの敬神的な罪への告白と償いによってジャックは改心し、人間としても成長する。

この点は、『珊瑚島』の改心というストーリーとは異なる点である。それは『十五少年漂流記』が改心の物語ではなく、改心は大人への成長の物語という新たな形で現されている。

ここに初期ロビンソンが持っていた極限状態に置かれた人間のあり様から離れて、純粋な子どもたちの自立的な成長の物語になっていく。また、『珊瑚島』や『宝島』にはなかった子どもの社会が、そこに明確に立ち現れる。無人島の経験は子どもが社会に出る前の揺りかごとして、健全に成長していく近代的な学校と同じものとして設定され、そこに社会の理想像があるのだ。

## VI. 野蛮なる子ども

『珊瑚島』でも『宝島』でも『十五少年漂流記』でも、子どもたちは純粋で善なる存在であった。しかし、『蠅の王』では、ロビンソン・クルーソーが描いたテーゼである極限状態における人間という問題に戻り、逆に子どもの善なる理性の崩壊を描いている。『蠅の王』の子どもたちは、時には愚鈍で臆病で意地の悪い子どもでもある。

例えば、子ども達のリーダーになったラーフは、リーダーの資質があるわけではなく、仲間を

十分に統率できない。ラーフがリーダーになった時も、『十五少年漂流記』のような理性的な選挙ではなく、選挙ごっこの雰囲気決まる。

「一般の大勢は、漠としてただ隊長を選びたいという希望から、ラーフという特定の個人を拍手喝采とともに選ぼうとする方向へ変わっていった。その立派な根拠は、だれにも見つけることはできなかったろう。……じっと腰をおろしているラーフのおちついた態度には、何か彼をきわだたせるものがあつた。からだの大きさ、魅力的な容貌、ということもあつた。」（ゴールディング、1975, p.32）

このように衆愚政治の暗喩であるかのように、子ども達の会議は混沌とする。他の物語のように象徴となる旗は掲げられずに、象徴として現れるのはほら貝である。ほら貝は、集会でほら貝をもったものに発言権があるというルール象徴である。したがって、ほら貝は、理性的な決り事の象徴でもあり、民主的な集会の象徴でもあった。しかし、集会は子どもたちの無責任な発言に終止し、ほら貝はしだいに豚の狩猟への狂気の前に力を失っていく。

「肉が必要なんだ——」

「その肉も手に入らないんじゃないか」

もう敵対関係は、はっきりと現れていた。

「でも、ほくは手に入れる！今度は必ず！この槍の先に逆とげをつけさえすればいいんだ！一匹の豚に手傷を負わせた槍がすべったんだ。逆とげさえつければ——」

「必要なのは小屋なんだ」（ゴールディング、1975, p.82）

「珊瑚島」でも「十五少年漂流記」でも、文化的な生活を保障した家や文明的な道具は、『蠅の王』ではもちろん失われていく。『蠅の王』では家は一応立つが、かろうじて屋根があるあばら家である。ラーフを中心としてかろうじて島を脱出するために、狼煙をあげたりするが、その仕事も継続できなくなる。子ども同士の口論は、しだいに恐怖を子どもたちにもたらし、彼らは得たいの知れない獣を夢の中で見始め、現実信じるようになる。豚を捕らえたジャック（ラーフと敵対する子どものリーダー）は、豚の首を槍に刺して見せる。



ジャックは豚の頭部を抱え上げて、棒の先端にその柔らかい喉の所をぐいと突き刺すと、先端は口のあたりまで貫いた。彼は、少し後へ退いた。豚の頭はその先端に曝され、血が少し棒切れを伝わって滴り落ちた。(ゴールディング, 1975, p.232)

(略)

「この頭は、あの獣にやるんだ。ぼくたちからの贈物だ」

静寂は、この贈物を受け取った。(ゴールディング, 1975, p.233)

獣は、彼ら自身の暗喩である。狩った豚の首と豚の死骸に集る蠅が、新たな象徴として物語に登場する。そして、彼らは蛮人となる。

「さ、始めろ——すぐにだ！」

二人の蛮人はぶつぶつ何か言った。ジャックは鋭く言った。

「さ、始めろ！」

二人の蛮人は互いに顔を見合わせ、槍を揃えて高く掲げ、いっしょに声を揃えていった。

「酋長の仰せなんだぞ」(ゴールディング, 1975, p.240)

このような狂気が、子ども全員に広がり理性ある子どもは逆に殺害されてしまう。そして、ラーフが逃げ惑う中で、海軍の士官が少年達を見つけ私が最初に引用した冒頭の場面へと展開する。最後に、ゴールディングは次のように書いている。

ラーフは、無垢(イノセンス)の失われたのを、人間の心の暗黒を、ピギーという名前をもっていた信実で賢明だった友人が断崖から転落して言った事実を、悲しみ、泣いた。(ゴールディング, 1975, p.348)

『蠅の王』は、1950年代の第二次世界大戦後に書かれたこともあり、人間の闇に真剣に目を向けた作品である。物語の設定自体も未来に起こった第三次世界大戦下に飛行機が墜落して無人島に漂着したという設定となっている。この点で言えば、子どもたちの野蛮な世界は、大人たちの戦争という野蛮な世界と大差がない。

ゴールディングは、この子どもたちを通して、人間や大人を痛烈に批判しているのかもしれない。それは近代以後の私たちが科学への信頼も失い、神も失い、民主主義や社会主義の希望も失っ

た中で、最後には「自然」な理性までも失ってしまった人間の告解と懺悔なのかもしれない。

## VII. おわりに ―それでも求められる「自然」

冒頭で、ルソーは、ロビンソン・クルーソーに極限状態におかれてもなお理性的で自立的な人間を見たのであり、市民社会を形成するのに必要な近代的な主体の具体的なイメージであった、と述べた。『珊瑚島』『宝島』『十五少年漂流記』では、子どもは純粋なもの、理性的な判断ができ自立的な子どもが理想的に描かれていた。もちろん作品ごとに違いはあり、『宝島』では海賊の善と悪の二面性が描かれていたし、『十五少年漂流記』では野蛮なるものの克服が子どもの成長として、自立的な子ども社会がユートピアとして描かれていた。反対に『蠅の王』では、野蛮な子ども(人間)の心の闇を描いていた。これらの物語は子どもを通して時代と社会に投影された希望と現実を語ってきた。『蠅の王』においても、戦争という社会秩序を反映しているに過ぎないのかもしれない。

ただ、現在の私たちの子ども像は、分裂している。一方では、「少年ジャンプ」で見られるような、努力・友情・成長(勝利)という物語が繰り返し、再生産されている。これは勤勉・勇気・熟慮という『十五少年漂流記』で描かれたテーマとほとんど変わりが無い。

もう一方では、『蠅の王』に近く、「自然」な理性が失われてしまった子ども像が現実にはある。例えば、悲惨ないじめの現実が『蠅の王』に近く、日常のイラつきと漠とした不安が悲劇的な結果をもたらしている(内藤, 2001)。そこには、希望を見出す子ども像が見られない。

それでも近年の暴力的な描写が多い青年漫画にも、興味深い物語がある。それは森恒二『自殺島』(2010)である。『自殺島』は、近未来の日本において自殺常習者が減らないことに政府が対策として、いわば流刑地として無人島に住まわせ、そこで自給自足の生活を強いられるという物語である。

登場人物が、各自の心の闇と傷と向き合いながら、なんとか生きていこうとする者、耐えきれず死んで行く者、恐怖政治を引こうとする者などあらわれてくる。しかし、注目すべきは物語の主人公のセイである。彼も自殺常習者であるが、無人島で彼が見出したのは弓と矢などによって狩猟することである。狩猟を通して、セイは自然や動植物の偉大さに触れ、生きる意味を取り戻していく。

これは『蠅の王』のような世界でありながらも、肉を狩るということを通して「Nature」としての「自然」ではなく、ありのままの「Wilderness」としての自然に触れることで人間の尊厳（自然・理性）を取り戻すという逆転の構図である。

森恒二（2008）の前作の『ホーリーランド』でもケンカという暴力が主人公にとっての唯一の自己の存在理由であったように、感覚的な存在感覚によって生きる意味が探究されることは、「自然」な理性を失った社会における一つのオルタナティブであるかもしれない。生々しい生にふれて、「自然」を取り戻すのである。

近代が作り上げた「自然」ではなく、荒々しい「自然（Wilderness）」の前の人間存在の小ささを自覚しながらも生きていくさまは、自らの存在を再認識し、新しい「自然」を獲得する、つまり、近代的主体の問題を知りながらも受け入れ、近代的主体をずらしていく、再帰的な近代論のように見える（ギデنز、1993）。

現代の私たちは、『十五少年漂流記』にある子どもたちに憧れを抱きつつも、現実には『蠅の王』のような世界を感じている。それでいながら、『自殺島』のように荒涼たる世界の中で自分自身（人間）の過去と傲慢さを反省しながらも生の感覚を取り戻し、自己の生きる意味を創出し、近代的な希望を見出す。

子どもが理性的であるとともに純真無垢であるというルソーの子どもの発見以降、子ども像は形を変えながらも、それでも「自然」は現在も生きているともいえるかもしれない。私たちは、あまりに理想的な世界と、あまりに残酷な現実のなかで引き裂かれ、手探りで迷いながらも、身体的な感覚と現実に接合した「自然人」の物語を語りなおしている。

### 参考文献

- デフォー、ダニエル、平井正穂訳（1967/1999）.『ロビンソン・クルーソー＜上＞』.東京：岩波書店。  
 ギデنز、アンソニー、松尾精文・小幡正敏訳（1993）.『近代とはいかなる時代か？』.東京：而立書房。  
 ゴールディング、ウィリアム、平井正穂訳（1975/2004）.『蠅の王』.東京：新潮社。  
 ホップズ、トマス、水田洋訳（1954/2006）.『リヴァイアサン1』.東京：岩波書店。  
 岩尾龍太郎（2000）.『ロビンソン変形譚小史』.みすず書房。  
 森恒二（2010）.『自殺島3』.東京：白泉社。

- 森恒二（2008）.『ホーリーランド 18』.東京：白泉社。  
 内藤朝雄（2001）.『いじめの社会理論』.東京：柏書房。  
 大塚久雄（1966/2003）.『社会科学の方法』.東京：岩波書店。  
 ロック、ジョン、鶴飼信成訳（1968/2004）.『市民政府論』.東京：岩波書店。  
 ロールズ、ジョン、田中成明・亀本洋・平井亮輔訳（2004）.『公正としての正義 再説』.東京：岩波書店。  
 ルソー、ジャン ジャック、今野一雄訳（1962/2004）.『エミール（上）』.東京：岩波書店。  
 ステイブンス、ロバート L、阿部知二訳（1963）.『宝島』.東京：岩波書店。  
 バレンタイン、ロバート、加能越郎訳（1949）.『さんご島の三少年—世界名作全集（138）』.東京：講談社。  
 ヴェルヌ、ジュール、波多野完治訳（1951/2004）.『十五少年漂流記』.東京：岩波書店。